

【準2級・解説】

リスニング

PARTE I (N1 – N4)

N 3 b

【正答率】77.9%

F: Questa mattina sull'autobus mi è successa una cosa strana...

M: Che cosa? Racconta.

F: Come ti dicevo ero sull'autobus, seduta vicino alla porta di dietro, quella da dove si sale. A un certo punto è salito un uomo di circa cinquant'anni, alto, elegante... e quando mi ha vista ha fatto un gran sorriso, è venuto verso di me e a voce altissima mi ha detto: "Luisa! Carissima Luisa! Come stai? Da quanto tempo!"

M: Era uno che conosci?

F: Ma no, è proprio questo che è strano. Mai visto prima! Gli ho risposto che non mi chiamo Luisa e che si sbagliava, ma lui non so se mi ha creduta. Mi ha guardato in modo strano e poi...

M: Ma tu non hai nessuna Luisa in famiglia? Una che ti somiglia? Una sorella, una cugina...

F: Ma no, assolutamente no, nessuna Luisa e nessuna che mi somigli. Poi lui si è seduto accanto a me e ha continuato a guardarmi per tutto il tempo.

M: E poi?

F: Poi niente. Dopo un po' io sono scesa e lui... lui è rimasto lì, sull'autobus. Che tipo strano!

【訳】(女)今朝バスの中で、私に奇妙なことがあったの……。 (男)何が？ 教えてよ。(女)あなたに言ってたように、私はバスに乗っていたの、後ろのドア、乗車するドアの近くに座って。そのうち50歳くらいの、背の高い、上品な男性が乗ってきて……。そして私を見ると満面の笑みを浮かべて、私の方にやってくると、とても大きな声で私に言ったの。「ルイーザ！ 親愛なるルイーザ！ 元気？ 久しぶりだね！」(男)君の知っている人だった？(女)違うのよ、おかしいのはまさにそこなの。前に一度も見たことがない人！ 私は彼に、私の名前はルイーザではないし、彼が間違っていると答えただけれど、彼が私の言うことを信じたかどうか分からない。彼は私のことをおかしな風に見つめて、それから……。 (男)でも君の身内にルイーザという人は誰もいないの？ 君に似た人で？ 姉妹やいとこ……。 (女)いないわ、全然、ルイーザも私

に似た人も一人もいないわ。それから彼は私の隣に座って私をずっと見つめ続けたの。(男)
それから？(女)それからは何も。しばらくして私は降り、彼は……彼はそこに、バスの中に残ったわ。何て奇妙な人かしら！

N 4 c

【正答率】57.7%

M: È una specie estremamente gregaria, che forma banchi molto fitti e disciplinati, composti da centinaia o migliaia di individui. Vive in acque aperte, senza alcun contatto con il fondale, abitualmente a una profondità di circa 30 metri. Durante la buona stagione, per deporre le uova, migra in acque costiere più superficiali. D'inverno, invece, può raggiungere i 180 metri di profondità.

【訳】(男)これは極度に群生する種で、何百、何千という個体からなるたいへん密で整然とした大群を形成します。開けた水域で、水底に至ることはなく、通常30メートルほどの深さに生息します。時候のいい季節には産卵のため、より海面に近い海岸水域に移動します。一方冬には、水深180メートルにも達することがあります。

PARTE V (N 17 – N 22)

Primo ascolto (N 17 – N 19)

F1: Pronto, Gabriella?

F2: Oh, Cristina! Ho visto il tuo messaggio. Che vi è successo, dimmi, avete avuto un incidente?

F1: Per fortuna non un incidente, solo un guasto alla macchina. Siamo rimasti fermi in autostrada, abbiamo dovuto chiamare il soccorso stradale, il carro attrezzi.

F2: Ma tu e Carlo state bene?

F1: Sì sì, benissimo, non ti preoccupare.

F2: Ora dove siete?

F1: A Bologna. Per pranzo non riusciamo certamente ad arrivare, quindi non ci aspettare. Se ce la facciamo veniamo per cena, altrimenti ci vediamo domani.

F2: Domani?

F1: Eh, sì. Il meccanico ha detto che la nostra macchina sarà pronta per questo pomeriggio o al massimo per domani mattina. Ancora non sappiamo.

F2: Ah, ho capito. Volete che venga io a prendervi a Bologna? Poi domani...

F1: No, dai, è troppo complicato. Nel caso ci fermiamo qui in un albergo. Ti facciamo sapere.

F2: D'accordo, Cristina. Salutami Carlo. A presto!

F1: Sì, a presto! Ciao, Gabriella!

【訳】(女1)もしもし、ガブリエッラ？(女2)ああ、クリスティーナ！ あなたのメッセージを見たわ。あなたたちに何があったの、教えて、あなたたちは事故にあったの？(女1)幸い事故じゃなく、単なる車の故障よ。私たちは高速道路で立往生して、ロードサービスと牽引車を呼ばなくてはならなかったの。(女2)それで、あなたとカルロは大丈夫なの？(女1)ええええ、とても元気よ、心配しないで。(女2)今、あなたたちはどこ？(女1)ボローニャよ。昼食には私たちは当然着けないから、私たちが待たないでちょうだい。もしうまくやれば夕食に伺うけど、でなければ明日会いましょう。(女2)明日？(女1)ええ、そう。自動車整備工が言ったんだけど、私たちの車の準備が整うのは今日の午後か、遅くとも明日の午前中なの。まだ分からないのよ。(女2)ああ、なるほどね。あなたたち、私の方から、あなたたちを迎えにボローニャに来てほしい？ それで明日……。 (女1)いいえ、いいわよ。ややこしすぎるわ。何なら私たちはここでホテルに泊まる。また連絡するわ。(女2)分かったわ、クリスティーナ。カルロによろしくね。また近々！(女1)ええ、また！ じゃあね、ガブリエッラ！

N 17 b

【正答率】92.8%

【訳】クリスティーナとカルロはひどい事故にあった

N 18 a

【正答率】89.2%

【訳】彼らの車は今自動車整備工のところだ

N 19 b

【正答率】82.4%

【訳】明日ガブリエッラは彼らを迎えにボローニャに行くだろう

PARTE I (N 23 – N 43)

N 23 c

【正答率】80.2%

【訳】日曜に私は自動車を使って田舎で周遊をしました。【解説】「～で」という場所を表現するとき、基本的に、狭い地点のときは前置詞aを使い、広い領域のときは前置詞inを使います。ここで、周遊の場所のcampagna「田舎」は広がりのある領域であり、やはり前置詞としてinを伴うので、c)が正解です。なお、前置詞perにもinと似た、移動の領域を示す用法がありますが、inのときのように後の名詞が無冠詞にはなりません。

N 24 a

【正答率】51.4%

【訳】残念ながら彼は信頼できる人ではありません。【解説】「～を信頼する」は〈fidarsi di + ～〉と表現するので、関係代名詞cuiの前にはdiを置くのが適切です。したがって、a)が正解です。なお、ここでのように、再帰動詞が非人称のsiと共に使われるとき、再帰代名詞のsiと非人称のsiの連続を避けるため、si siがci siとなります。

N 49/50

Non so (49) sia il caso di invitare anche Aldo. Lui e Salvatore non vanno per niente (50) .

【訳】アルドも招待するのが適切かどうか私は分かりません。彼とサルヴァトーレは全く気が合いません。

N 49 a

【正答率】49.1%

【解説】空欄に、間接疑問節を導く接続詞se「～かどうか」を入れると、自然な文意になるので、a)が正解です。

N 50 c

【正答率】53.6%

【解説】4つの選択肢の名詞部分の基本的な意味は、a)のamore「愛」、b)のamicizia「友情」、c)のaccordo「(意見の)一致」、d)のaffetto「愛情」です。これらの中でaccordoは動詞andareと組み合わせると、「意見が一致している、気が合う」という意味の成句〈andare d'accordo〉になります。よって、文脈に合うc)が正解です。

N 51/52

【訳】最初は、慣れていない人にとって、箸を使って食べるのは少し不便かもしれません。

N 51 c

【正答率】63.1%

【解説】4つの選択肢の基本的な意味は、a) i rametti「小枝」、b) i legnetti「小さな木材」、c) le bacchette「棒」、d) i paletti「杭」です。これらの中でle bacchetteには「箸」という意味もあり、文脈に合うので、c)が正解です。

N 52 b

【正答率】47.7%

【解説】4つの選択肢の基本的な意味は、a) comodo「快適な」、b) scomodo「快適ではない」、c) conveniente「適切な」、d) inconveniente「適切ではない」です(ただし、inconvenienteよりも、同様の意味の sconvenienteの方がよく使われます)。comodoの「快適な」というのは、物事が快適さを与えるということで、scomodoはその反対です。一方、convenienteの「適切な」というのは、物事が状況に適しているということで、inconvenienteはその反対です。ここでは、箸を使うことが状況として適切か不適切かという文脈ではなく、それが快適さを与えない、つまり不便だという文脈ですので、b)が正解です。

【訳】トマトソースのスパゲッティはおそらく世界で最もよく知られたイタリア料理です。私たちの惑星のどこで供されようと、かの有名な赤いソースで味付けされた長い糸のようなパスタは、たちまちイタリアを連想させます。ですが今日私たちがこれほどによく知っているレシピのさまざまな材料は、はるかな彼方から伝来しています。『起源の神話。トマトソースのスパゲッティ小史』という本で、歴史家マッシモ・モンタナーリはこの一皿の変遷を私たちに語っています。

まず手始めに、イタリアにパスタをもたらしたのが、その中国旅行から戻ったマルコ・ポーロであったというのは、モンタナーリが私たちに説明するところでは、誤りです。今はやりの言い方では、「フェイク・ニュース」にすぎません。実際には、当時イタリアではパスタはもうずっと以前から存在していました。中近東に起源を發し、次いでギリシャ世界へ、さらにローマ世界へと伝わっていたのです。他の食材と一緒に調理される生パスタ生地と並んで、さらに後には、デュラム小麦で作られる乾燥パスタも伝わりました。乾燥技術はアラブ人の手でイタリアに、とりわけシチーリアにもたらされていました。シチーリアではすでに 12 世紀半ばに史上初の乾燥ロングパスタ産業の記録があります。その土壌の性質と好適な気候は、ローマ時代にすでに「ローマの穀倉地帯」として知られていたこの島を、デュラム小麦パスタ産業の揺籃の地としていたとのことです。

パスタの歴史はまた、チーズのそれと緊密に結びついています。トマトソースに次いで最も有名な 2 つのパスタのレシピ、「カルボナーラ」と「カーチョ・エ・ペーペ(チーズと胡椒)」を思えば十分に分かります。2 つとも安価で保存しやすい材料が基になっていて、前者は卵、パンチェッタ、チーズ、胡椒、後者はチーズと胡椒だけです。調味料として用いられるチーズは長い間「ペコリーノ」でしたが、12 世紀から 13 世紀にかけて書かれたレシピ本のいくつかでは、早くも「パルミジャーノ」の利用が推奨されています。また何世紀もの間、パスタはあくまで白いものでした。そこにはチーズ、バター、香辛料が、また時にはラルド(豚の背脂を塩漬けにした加工食品)が加えられていましたが、赤いソースは皆無でした。実際、周知のように、トマトはコロンブスを得て初めて南米からヨーロッパにもたらされたということですから。スパゲッティを赤いソースと最初に出会わせたのはメキシコの征服者エルナン・コルテスだったようですが、チーズに加えて(チーズのかわりに、ではなく)トマトソースを使ったパスタの味付けが初めて試みられたのはナポリででした。パスタをトマトで調味する慣習を体系化したのは、現代イタリア料理の基礎になっている書物『La scienza in cucina e l'arte di mangiar bene(厨房の学とよい食の術)』を 1891 年に著したペレグリーノ・アルトゥージでしょう。20 世紀においてトマトはパスタの主な調味料へと、そしてチーズは単なる添えものへと変わってゆきます。スパ

ゲッティを(もはやバターやラードだけでなく)オリーブオイルで調味する習慣は、ようやく近年になって確立したものです。

(2019年11月13日付 tg24.sky.it 「トマトソースのスパゲッティの正しい歴史」に大幅に加筆)

N 56 b **【正答率】69.8%**

【訳】12世紀から13世紀にかけてペコリーノチーズが生産され始めた

N 57 b **【正答率】66.2%**

【訳】パスタを初めてチーズとトマトで調味したのはエルナン・コルテスだった

N 58 b **【正答率】57.2%**

【訳】ナーポリではチーズの代わりにトマトでパスタを調味するのが習慣になった